《修士論文要旨》

『天稚彦草子』について

小貝真未*

御伽草子の『天稚彦草子』について考えていく。天界遍歴・唐櫃、一夜瓢などの不思議な道具・主人公の天稚彦とはどのような人物であったのか・難題の大きく四つに分けて論じている。

天界遍歴については、この『天稚彦草子』以外にも描かれている作品が多数存在している。今回は天界遍歴が描かれている作品である、『梵天国』『おもかげ物語』『玉造物語』の三作品を例に挙げ、天界の描写、天界への行き方、天界に着いてからの遍歴の点に注目し、『天稚彦草子』と比較をした。そして、それぞれの物語の特徴を挙げ、その特徴からどのようなことが言えるのか、見えてくる『天稚彦草子』像を考えた。

『天稚彦草子』の物語展開において重要となる道具が三つ登場する。唐櫃と一夜瓢と天稚彦の袖である。これらの道具が物語の中でどのように働き、どのようなものなのか。

唐櫃は何でも欲しいものが手に入る魔法の箱である。また、天稚彦が天に戻る際に妻に唐櫃をけして開けるな、開ければ戻れなくなると言っている。そして妹に嫉妬した姉たちが箱を開けてしまい、煙が立ちこめる。しかし箱には何も入っていなかったが本当に天稚彦は妻のもとに戻れなくなってしまう。このように唐櫃は物語展開の上で重要な役割を担っているというのが理解できる。また、一夜瓢は妻が天界へ昇る際に使うウリ科の植物である。天稚彦の袖は妻が鬼に難題を課せられた時に使った物である。天界では身分が高い天稚彦の私物なので、布切れでも「天稚彦」と同じくらい価値があるものであると思われるので不思議な力を発揮したのではないかと考えられる。

そして主人公の天稚彦は物語の中でも謎が多い人物である。詳しい描写もない。はじめに長者の前に現れたときは蛇の姿をしていた。結婚をした妻の前に現れて、妻に頭を斬らせると、中から美男子が出てきた。蛇であったが人間の姿であったりと不思議な人物である。また、天稚彦は日本神話に出てくる天若日子であるとされている。天若日子は葦原中国を平定するにあたって遣わされた天穂日命が三年たっても戻ってこないので代わりに遣われた者である。この天若日子は任

平成23年度　*文学研究科国文学専攻

務を遂行しないで人間の女性と結婚をし、天界に戻らなかった。そして裏切り行為の末、殺されてしまうという神であった。この天若日子をモデルにした理由はあるのか、そして天稚彦とはどのような人物であったのか。

『天稚彦草子』と『古事記』『日本書紀』で大きく異なるのは、天稚彦（天若日子）が生きているか、ということである。『古事記』で裏切り者として描かれた天若日子の汚名返上のために描かれたのが『天稚彦草子』であったと考えることができる。天界に戻る、戻らないで天稚彦の運命が変わったのである。

天稚彦の妻は鬼に様々な難題を与えられる。まず、牛の世話をするという試練を課せられた。朝に牛を倉から出し、夕方に牛を倉に入れるということである。一人でこなすには困難である。しかし、天稚彦の袖を振って「天稚御子、天稚御子の袖々」と呪文を言う。すると牛たちは女の言うことを聞くようになって、無事に倉から出すことができ、入れることもできた。次に、米を隣の倉に運ぶという仕事を課せられる。この試練も一人でするのには困難である。しかし再び、天稚彦の袖と「天稚彦」の呪文によって、蟻に米を一粒ずつ運ばせて切り抜けることができる。

そして三つ目は百足の倉に一週間閉じ込められる。四つ目の試練は蛇の城に一週間閉じ込められる。いずれも対処は天稚彦の袖と「天稚彦」という呪文によって切り抜けている。この難題譚の作品も数多くある。今回は『古事記』『観音の本地』の二作品を例に挙げ、『天稚彦草子』と比較していき、そこから見える特徴を探っていった。

難題にも様々な種類がある。体力的なもの（『天稚彦草子』での、米の運搬・牛の世話）・精神的に苦痛なもの（『古事記』『天稚彦草子』での、蛇・百足の倉に籠もる）・知恵的なもの（『観音の本地』に出てくる、〝三日以内に足一つ・目一つのものを十人ずつ尋ねて参らせよ。〟というようなもの）である。難題の種類を挙げていく上で感じたのは『天稚彦草子』での難題はどれも過酷なものであったということが目立つことがわかる。

このように『天稚彦草子』は不思議な物語である。様々な事柄を織り交ぜた読み応えのある作品である。